日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 5 号 / Boletín Núm. 5

2003 年 1 月 10 日 / 10 de enero de 2003

事務局
〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9
日本学会事務センター
Tel: 03-5814-5801 Fax: 03-5814-5820

編集局
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6
京都外国語大学イスパニア語学科(坂東研究室)
Tel: 075-322-6121 Fax: 075-322-6246

ホームページ: http://www.nanzan-u.ac.jp/HISPANIA/

巻頭言

山田 善郎（大阪外国語大学名誉教授）
（関西外国語大学教授）

先達て日本イスパニヤ学会の会報に「巻頭言」を寄せるようにとの依頼を受けた。なにを今さらこの老残の身がという思いしきりだったのだが、ついつい乞われるままに埋草のつもりで引き受けることになってしまった。と言っても所詮は老歳、それらしく平仄を合わせようとすれば、勢い本学会草創の昔を思い起こしながら字数を埋めていくことになる。

日本イスパニヤ語学会－久しくそう呼ばれていた－の創立総会は 1955 年(昭和 30 年) 12 月、東京外国語大学で開催された。私の伝聞したところでは、その同じ年の夏、早稲田大学の水谷清氏らの提唱によって学会創設の準備会が何度か東京は有楽町の「フジアイス」で開かれたそうである。その後も度々この店の名前が会合の場として出てくることになるのだが、今もなお健在なのだろうか。さてそれはともかくとして、この年は私が大阪外国語大学に勤めだして 5 年近く経った頃のことである。当日、全国から馳せ参じた出席者は総勢 47 名、そのうち関西方面から参加したのはたしか 10 人にも満たなかったと記憶している。なにしろ私は未だ助手の身分、並み居る全ての人が高名な大先生ばかりで、畏れ多くて縮こまりながら使い走りをしているうちに議事が進み、初代の会長として東京外大の永田寛定先生、副会長には大阪外大の佐藤久平先生と東西の両雄がそれぞれ就任される運びとなった。なお理事として笠井鎮夫、大谷弥七、大林多吉、古川武司、渡部登、水谷清、会田由、国沢慶一、武内恒次、高橋正武、諸橋宏の諸氏が指名、承認された後、理事の互選によって笠井鎮夫先生が理事長に選任された。今でもその折々の先生方の言動が何かの拍子にまるで低速度再生による被写体よろしく妙にゆっくりと、紗を通したように淡く浮び上がってくることがあるのだが、残念ながら殆どの方々は既に鬼籍に入ってしまわれている。午餐会の後の研究発表では、町田俊昭氏が「現代スペイン語における与格の機能について」、大島正氏は「ベルナル・ディアスとメキシコ征服」、会田由氏が「ロマンセについて」と題し蘊蓄の程を傾けて学会の将来性を窺わせるにたる証を確かなものにしていた。翌年の第 2 回大会は上智大学で、第 3 回目は 1957 年 10 月、大阪外国語大学で開か

れることになったのだが、その初代イスパニア語学科長で、学会の初代副会長でもある恩師佐藤久平先生が大会当日を待つことなく、病を得て不帰の客となってしまわれた。先生は小柄ながら古武士然とした風格の持ち主で、こと学問に関しては極めて厳しかったが、時には茶目っ気を覗かせることもあり日常生活では Don 久（Kyu）と親しまれてどの学生からも慕われていた。亡くなられる少し前、65 歳の定年を機に名誉教授の称号を受けられることになり、使者に立った私を前にして大阪大学付属病院の病床で紋付の羽織に姿を変え、居住まいを正して証状を手にされた光景が今でも鮮やかに焼き付いている。たしか大阪外国語大学名誉教授第 1 号であったはずである。

あれからおよそ 50 年、今では会員数約 400 人を数え、今年の研究発表数は各分科会に分かれて 18 の多きに達しているとか。質量ともにその発展ぶりたるやお互いまことに慶賀の至りであるが、いかに年ふり人は替わっても、あの「フジアイス」の一室でスペインならびにイスパノ・アメリカの言語や文化を愛好し、研究する集団の存在理由を確立しようと行動を起こした一握りの先達たちの見識と情熱が源流となって洋洋、今に及んでいることに懐旧の情を込めて思いを致す昨日、今日である。

Lope Blanch 先生のこと

三好 準之助（京都産業大学）

今年（2002 年）もまた、世界中のスペイン語学研究者にとって実に辛い年になった。悲しいことだが、何人かの先達が亡くなられたからである。そのなかに don Juan Miguel Lope Blanch 先生もおられる。私は先生が 5 月 8 日に亡くなったという訃報を、5 月 10 日付の、ラテンアメリカ言語学会（ALFAL）の会長である Castilho 先生からメールで知らされた。その 3 ヶ月ほど前に、当学会の大会が開かれたコスタリカのサンホセでお会いしたばかりであり、そのときも先生は、私の挨拶に対していつものようににこやかで、少しはにかまれたようなお顔で応えてくださった。まったく信じられないほど急な出来事であった。

私が先生と親しく話す機会に恵まれるようになったのは、十数年前に入会した上記の学会のおかげである。大会のたびに先生のご発表を聞き、habla culta のプロジェクトの報告会でお話を聞いたりして、色々と教えていただくことができた。さらに、スペイン語歴史学会の大会でもお会いできたし、アメリカ・スペイン語国際会議でもお会いした。私が興味を抱いて参加する大会の会場にはほとんど常に先生のお姿を拝見することができた。また何度かお手紙を差し上げたり、草稿をお送りしたりして直接に教えを仰いだこともある。他方、間接的にではあるが、そして申し上げるまでもなく当然のことではあるが、これまでアメリカ・スペイン語を勉強するとき、先生の論文から数え切れないほどの教えを受けてきた。昨日も Léxico indígena en el español de México の内容を再確認したところである。

ロペブランチ先生は青年時代、詩人になる道を進もうとされたこともあったそうである。しかし思うところがあって作家になることをあきらめ、その道から文学研究の道に軌道修正され、マドリード中央大学の哲文学部に入られた。当時は文学研究と言語研究が一体となっていたことから、大学では Dámaso Alonso 先生や Rafael Lapesa 先生の教えを受けられ、さらに個人的に Ramón Menéndez Pidal 先生と接することができたことから、こんどは言語研究の道に入られた。卒業後、機会があっ

てメキシコに渡り、かの地で未開であったメキシコ・スペイン語研究の分野を開拓され、多くの教え子を育ててこられた。

このように、スペイン文献学の主流を歩まれ、その泰斗であられるにもかかわらず、少なくとも私には、一度も大家であるような素振りを見せられなかった。そして終生、第一線の研究者として、若い人たちに混じって研究発表をされていた。私は先生の学者としての姿勢からも多くを学ぶことができた。

さまざまなお教えに改めて感謝しつつ、心よりご冥福をお祈りいたします。

【国際会議報告】

第3回国際スペイン認知言語学会
III Congreso Internacional de la Asociación Española de Lingüística Cognitiva, Valencia

青砥 清一（東京大学大学院博士課程2年）

2002年5月15日～17日の3日間、Valencia大学にてスペイン認知言語学会(AELCO)の第3回国際大会が開催された。AELCO (http://www.um.es/lincoing/aelco/) は1998年に設立、Murcia大学文学部に本部を置く。日本認知言語学会やスラブ認知言語学会などとともに、国際認知言語学会（ICLA）のメンバー学会の一つである。若い学会ではあるが、スペイン・中南米のみならず、米国、欧州各国そして日本など非西語圏からの出席を加えて150名の参加を数え、スペイン語研究者間の認知言語学に対する関心の高まりを窺わせる。

本大会では、認知言語学の最前線に立つ6名の研究者による基調講演が設けられた。Ricardo Maldonado (Universidad de Querétaro, México) は、今年 Cognitive Linguistics 誌上で発表して間もない、スキーマ理論に基づく与格の研究について講演。José Luis Cifuentes Honrubia (Universidad de Alicante) は、情報構造の側面から前置詞の談話標識機能を取り上げた。Francisco José Ruiz de Mendoza (Universidad de La Rioja) は、ラネカー、レイコフ、フォコニエなどのメトニミーに関する様々な認知モデルの関連性について解説。Barbara Lewandowska-Tomaszczyk (Universidad de Lodz, Polonia) は、多義の認知モデルと言語習得に関する研究を発表した。また、Enrique Bernárdez (Universidad Complutense de Madrid) は、エクアドル北西部の cha'palaachi 語の動詞接辞を例に、話し手の空間認知と言語の関係について論じた。さらに、隣接科学である人工知能研究からは、Luc Steels (VUB AI lab-Brussels; Sony Computer Science Lab-Paris) が、格文法を実装したロボットによるメトニミー的意味拡張のシミュレーションを提示した。

76の研究発表では認知言語学の主要なトピックが並んだ。その一部を挙げると、受動態・中間態（E. Palancar, N. Delbecque)、主題化（X. A. Padilla García)、構文文法（J. Hilferty et al.)、アスペクト助動詞と文法化（M. Pérez Saldanya, 筆者)、現在分詞と関連性理論（T. Vingher)、移動動詞とフレーム意味論（M. Cristóbal)、ダイクシスと空間認知（B. Callejas, M. González-Márquez et al.)、メタファー・メトニミー（A. Barcelona, D. Rojo, O. Díez, M. S. Peña Cervel)、多義性（J. G. Fernández)、概念化（N. A. Martínez, G. S. Espinar, H. Soler et al.)、概念融合（C.

M. Ávila)、メンタル・レキシコン (K. Duvignau et al.)、談話標識(B. Fraser, M. G. Condom)、第2言語習得 (J. Sánchez)、認知モデルの応用:学習評価 (N. E. Fuertes)、英語－カタロニア語翻訳 (H. González i Escolano) などである。このほか、学際的な研究として、遺伝子と言語活動の相関に言及した生物学的研究 (J. Hilferty et al.) があった。

次回第4回大会は、第8回国際認知言語学会が2003年7月にLa Rioja大学で開催されるため、翌2004年5月Málaga大学での開催予定である。

最後にこの場を借りて、今回の学会発表申請にあたり査読用スペイン語原稿の作成にご支援を賜ったAntonio Ruiz Tínoco先生に御礼申し上げたい。また、出国前にバレンシアの現地情報をご提供頂いた本田誠二先生にも併せて感謝の念を表したい。

【学会紹介】

CANELA
Confederación Académica Nipón-Español-Latinoamericana

Arturo Escandón (Secretario General)

CANELA es una sociedad de hispanistas en Japón cuyo propósito es dedicarse al estudio y profundización de los temas relacionados con el ámbito hispánico o con «lo español». Su rasgo más definitorio es que es la única sociedad japonesa de hispanistas que emplea el español como lengua vinculante de todas sus actividades, desde las reuniones organizativas de sus miembros hasta los congresos que desarrolla anualmente.

Dada esta particularidad, el número de socios de CANELA es (comparado con otras asociaciones de índole similar) aparentemente reducido. Sin embargo, la Confederación, al cabo de un poco más de una década de vida, es una de las sociedades de profesores e hispanistas más dinámicas del país. El número de miembros sobrepasó el centenar en 2000 y la participación de ciudadanos japoneses y extranjeros es simétrica.

CANELA cuenta con una sección dedicada exclusivamente al estudio de la Metodología de la Enseñanza del Español como Lengua Extranjera, constituida por docentes de reconocido prestigio, cuyas obras y publicaciones avalan una trayectoria profesional de excelencia y dedicación. Asimismo, las secciones de Literatura y Pensamiento son espacios privilegiados de difusión de las letras hispánicas y de la actividad intelectual en lengua española.

Puntos de interés

El primer Congreso de CANELA se celebró en 1989 –los días 18 y 19 de noviembre– en la Universidad Nanzan de Nagoya, Aichi.

CANELA organiza continuamente talleres de perfeccionamiento de profesores de Español como Lengua Extranjera, así como seminarios de Literatura y otros.

CANELA publica anualmente *CUADERNOS CANELA*, una revista que reúne las actas del Congreso, reseñas y artículos académicos.

Página Web: http://www.nakamachi.com/canela

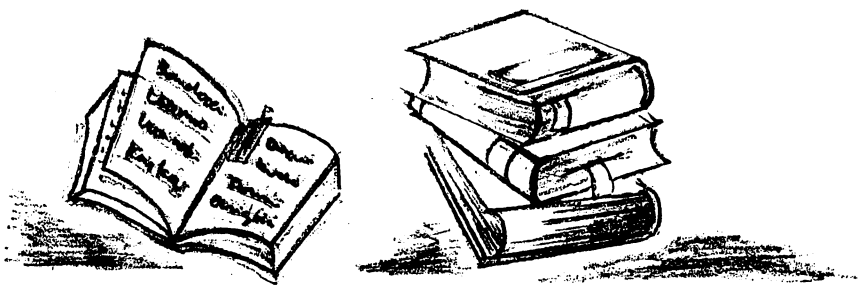
ディエス・ボルケ博士の品川キャンパス連続講演会

吉田 彩子（清泉女子大学）

昨年に予定されていた清泉女子大学大学院主催のコンプルテンセ大学正教授ホセ・マリア・ディエス・ボルケ博士の講演会は、急病と同時多発テロ直後の航空不安による2度のドタキャンで、学内のみならず社会にも大変なご迷惑をおかけする不祥事となった。柳川のお殿様よろしく「御花」と名付けられたプエルタ・デ・イエロの豪邸に住み、蔵書3万5千冊、ガレージには真赤なメルセデス、40冊を越える著作と世界41ヶ国の招聘歴を誇るスター学者にも悪夢だったに違いない。コーディネイトの私は「狼だあ！」と叫んでも信じてもらえない少年のようなことになり、気がつけば「あとがない」土俵際にいた。寛大にもグラシアン基金が特別措置として3度目のチャンスを与えてくれたので、昨年同様のプログラムで9月30日から10月12日までの2週間、毎夕6時10分（土曜は2時）から公開講座として12回の連続講演会を開催する運びとなった。だが、今年に入ると学科長に任命された博士の身辺は多忙をきわめ、この2週間にはソフィア王妃が来臨される博士脚色のローペ作品の初演や、国王主催のナショナル・デーのレセプションなど晴れがましい行事が重なった。「本降りになって出てゆく」の心境だったに違いないが、物事はそういうものだ。先約を優先していただいた。学外から41名、本学の院生・学生86名が登録し、これに教職員を加え、初日から定員130人の視聴覚教室がほぼ満席となった。「黄金世紀の文学と社会」と銘うった講座は演劇4回、詩4回、散文4回の三部からなり、演題は、①黄金世紀演劇の諸方向 ②上演法 ③バロックにおける祝祭と演劇 ④世界的な劇作家カルデロン ⑤周縁と抵抗の詩－Ⅰ ⑥周縁と抵抗の詩－Ⅱ ⑦詩と図像：賛美と祝賀の詩－Ⅰ ⑧詩と図像：賛美と祝賀の詩－Ⅱ ⑨騎士道小説 ⑩ピカレスク小説 ⑪報道の散文： avisos とその他のジャンル ⑫バロックの女性小説。30年余にわたる研究を俯瞰する構成だ。演劇と「騎士道小説」「ピカレスク小説」は満員御礼。先端的な研究分野である「報道の散文」にも熱気があった。意外に人気があったのが最終日の「バロックの女性小説」。男女共同参画社会という、新世紀の要請に応えようとする計算だろうが、この演題は笑う。運命のパートナー、サラゴサ出身一歳年上のアンヘラは筋金入りのフェミニスト。出藍の娘21歳は戦闘的フェミ。いっぽう1947年ソリア県の過疎村に教員の長男として生まれた野人は、大著『評定スペイン思想史』のホセ・ルイス・アベリャンが定年も間近になって離婚し、若い女性と再婚したことに動揺をかくせない典型的マッチョの気風。攻防は熾烈とならざるをえない。熱くもない鉄がうたれて、毒にも薬にもならない女性の味方になった挙句、ハーヴァード大学で戦闘的フェミニスト集団につるし上げられた。「つるすなら呼ぶなっての」とフテりつつ、横目でチラリ聴衆に釘を刺す。現代文学をコンプルテンセで教えているアンヘラが、「遠い話だ。もう忘れた」と博士が切り捨てたがる、幼年期の思い出や家郷の歴史を正視する癒し系フリオ・リャマサレスの小説に共感し、仲良しなのもわかる気がする。日本ではじめて扱われる刺激的なテーマもあった。「周縁と抵抗の詩」では張り紙や壁新聞のようなかたちで非合法に流布した風刺と抵抗の詩が、「詩と図像」では権力を誇示する祝祭に用いられた詩が紹介された。いずれも街頭に存在した詩で、従来の文学史で扱われてきた書物の中に存在する詩とは異なる。博士が発見した貴重な資料もスライド公開された。豊かな招聘の経験によって蒸留された講演は、異国の学習者に対する配慮がゆきとどいていた。はりのあるバスバリトンと明確な発音。語彙も可能なかぎり簡明に整えてあり、学部の上級生にも理解が可

能なものになっていた。長年の勘で、博士には聴衆の理解度がわかるという。大多数が内容を把握できているとのことだった。聴いているだけで贅沢な気分になる、緩急自在の淀みない名調子に加え、時に脱線し、ユーモアたっぷりの話術で会場を魅了してゆく。熊のような髭とぽっこりのお腹は、タリバンのザイーフ大使やパバロッティを彷彿させ、荘重な所作は名優が大学教授を演じているみたいに完璧だ。フランコ独裁下のサラゴサ大学で研鑽を積み、学生時代から教壇にたった。二年先輩にグラシアンの権威アウロラ・エヒドがいる。師はいない、という。エミリオ・オロスコ、ロベル・ジャム、そして言語のラファエル・ラペサを敬愛する。アウロラにも共通する際だった雄弁は毎回大きな拍手を浴び、ついには花束にエスカレートした。名説教師だったグラシアンの末裔ということか。講演が苦手なケベード研究者パブロ・ハウラルデ・ポウと対照的だ。60 分間の講演のあとに 30 分間の質疑応答コーナーを設けた。高水準の質問攻めに満足した博士は、3 日目には「さあ、コロッキオを始めましょう」とテンションをあげた。質疑応答の通訳は私が 7 日間、ＮＨＫラジオ講座の木村琢也さんが 3 日間、ＢＳ1 の放送通訳としても知られる長野太郎さんが 2 日間、分野の違いをこえて受け持った。木村さんは机の上に黄金世紀の文献を山積みにして準備されたそうだ。担当でない日も万一に備え、通訳の後ろの席でノートをとり続けてくれた。文学研究の性質上、往時の教会批判や修道院の実情、性や暴力にも言及せざるをえない。博士はカトリック女子大という本学の特質を尊重し、迷惑がかかるならカットしてもよいと譲歩を示唆した。清泉が「学問の自由」を保障していることを伝えると、本学の姿勢に対する評価と謝辞を最終講演で述べた。カルチャー・ギャップによるトラブルもあった。まず、喫煙マナー。講演が始まると男子用の便器に吸殻が発見されるようになり、管理課からクレームがついた。「安全じゃないか。みんなやってることだ。なぜいけない。論理的に説明してみろ」と博士ぶんむくれ。非論理的におやめいただいた。恐怖感と勇気にもギャップはあった。2 日目の晩、戦後最大級の台風 21 号が首都圏を直撃した。時差ボケで不眠症になり「このままでは絶対に死ぬ！」とパニくっている博士が、台風は少しもこわがらない。おかげで中止せずにすんだが、暴風雨の中を高輪のホテルまで歩いて帰るといいはるのをアンヘラと一緒に諭して正門横の守衛所にとじこめ、タクシーに乗せるのは一苦労だった。二人を天麩羅屋に招待したとき、カウンターに置いた私の 100 円ライターから使用後も小さな炎が出ているのを、仲居さんが発見して騒ぎになり、捨ててもらった。ライターの持ち合わせがない博士は、捨てるなら俺にくれろとダダをこねて仲居さんを困らせた。「日本人ってのは、台風でも、火でも、いちいち大騒ぎするやつらだ。それっぽちの火、俺にはなんでもないぞ」

……なぜ夏になると毎年パエリャで山火事が起こるのかわかるだろう。



2002年度第2回・第3回理事会

第2回　日時：2002年9月22日　13：00～16：00
場所：モンブランホテル（名古屋駅前）2002年度第3回理事会
第3回　日時：2002年10月19日　11：00～12：00
場所：東京外国語大学（4F語学研究所）

報告・審議事項

1. 入会申請11件、退会者10名を承認した（別記参照）。
2. 『HISPÁNICA』第46号の進捗状況について。12月末刊行予定。目次と規約のスペイン語訳を掲載する。
3. 日本学術会議への再登録完了。
4. 本学会を「地域学の現状と課題」シンポジウム協賛学会とした（2002.11.9、日本学術会議太平洋学術研究連絡委員会地域学研究委員会主催、於専修大学）。
5. イスパニヤ学会創立50周年大会（2004年度）企画の進捗状況について。
   日時：2004年10月末の土曜日、日曜日の2日間
   会場：南山大学名古屋キャンパス
   特別企画：Real Academia Española 会長 Víctor García de la Concha 博士による講演。
6. 以下の案を総会に諮る。「理事長職を廃止し、代表理事がその職務を行う。代表理事は会長の兼任とする。会長は理事会の互選とする。副会長は理事の中から会長がこれを任命する。」選挙法は従来通り郵便投票による。同数票獲得の場合は決選投票を行う。
7. 『HISPÁNICA』の締切期日を4月末日に変更、総会に諮る。投稿原稿のジャンルの多様化に伴い、査読の判定基準を検討。
8. 2003年度大会は立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）で開催される。講演者にJosé Luis Abellán氏を推挙。
9. 庶務委員を2名とし、新たに伊藤ゆかりを選出。
10. 2001年度会計決算、監査報告。2003年度予算案承認。

2002年度役員

会長/代表理事：　木下　登　　副会長：　福嶌教隆
理事：（東日本）上田博人、大高保二郎、木村琢也、斎藤文子、高山智博、野谷文昭、原　誠、本田誠二、アントニオ・ルイズ・ティノコ
　　（西日本）有本紀明、佐竹謙一、角田哲康、出口厚美、中岡省治、坂東省次、堀田英夫
監査：　（東日本）藤田一成　　（西日本）長谷川信弥
庶務委員：　浅若みどり、伊藤ゆかり
会計委員：　角田哲康
編集委員：　木下　亮、木下　登、木村琢也、斎藤文子、佐竹謙一、野谷文昭（委員長）、アントニオ･ルイズ・ティノコ
広報委員：　坂東省次、堀田英夫

第48回日本イスパニヤ学会大会プログラム

［期日］2002年10月19日（土）～20日（日）
［会場］東京外国語大学（http://www.tufs.ac.jp/index-j.html）研究講義棟
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
［連絡先］寺崎英樹研究室　℡042-330-5248；e-mail: terasaki@tufs.ac.jp

第1日目（10月19日）

理事会　11:00-12:00　（会場：4F語学研究所）
総会　13:00-13:50　（会場：2F 227教室）

研究発表

《分科会［語学］》　（会場：2F 226教室）
司会：上田博人
14:00-14:30　鈴木恵美子　「半島スペイン語とメキシコスペイン語における単純過去と現在完了—現代戯曲における使用—」
14:30-15:00　和佐敦子　「条件文におけるes queの意味機能」
15:00-15:30　栗林ゆき絵　「alguno を伴う名詞句における数の問題」

休憩

司会：川上茂信
15:45-16:15　塚原信行　「スペイン・カタルーニャ自治州における言語の席次計画」
16:15-16:45　糸魚川美樹　「カスティーリャ語の『ジェンダー』」
16:45-17:15　三好準之助　「基礎語彙のなかの先住民語系語の共時的諸特徴」

《分科会［文学・文化］》　（会場：1F 115教室）
司会：有本紀明
14:30-15:00　三浦麻衣子　「ルイス・ブニュエル『哀しみのトリスターナ』（1970）におけるプロット構成の諸特徴」
15:00-15:30　佐藤佐知　「Aranmanoth（2000）におけるAna María Matuteの語りの技法」

休憩

司会：三村具子
15:45-16:15　大楠栄三　「作中人物導入の手法：エミリア・パルド＝バサンにおける変容—エミール・ゾラとヘンリー・ジェイムズとの関係において」
16:15-16:45　Florentino RODAO　“La cultura española en Filipinas durante la ocupación japonesa”

講演会　（会場：2F 227 教室）
17:30-17:35　東京外国語大学学長挨拶
17:35-18:30　Prof. Dra. Emma MARTINELL (Universidad de Barcelona)
"La competencia comunicativa y la competencia cultural, metas de una enseñanza globalizadora de la lengua española"

懇親会　18:45-20:30　（会場：生協　ホール・ダイニング；会費 5000 円）

第 2 日目（10 月 20 日）

研究発表
《分科会［語学］》　（会場：226 教室）
司会：　Takuya KIMURA
9:30-10:00　Noritaka FUKUSHIMA "Un pequeño informe sobre la selección del modo –con especial referencia a las cláusulas factivas–"
10:00-10:30　Makoto HARA　"¿Qué es el modificador cuasi-primario de movimiento de la gramática productiva española?"

閉会

【特別企画　日韓合同研究会　語学部門】　（会場：2F 226 教室）

司会：　Noritaka FUKUSHIMA
11:00-11:30　Hiromi YAMAMURA　"El adverbio *siempre* y las dos formas verbales del pasado"
11:30-12:00　Hyung-nam NOH　"Una propuesta para colaborar en la enseñanza del español por medio de la red *grid* en la zona asiática"
12:00-12:30　Jun-nosuke MIYOSHI　"Sobre algunos anglicismos posibles"

《分科会［文学］》　（会場：2F 224 教室　☆第 1 日目と会場が異なります）
司会：　本田誠二
10:00-10:30　内田兆史　「『伝奇集』における「全体」と「部分」」
10:30-11:00　斎藤文子　「『ドン・キホーテ』最初の邦訳で行なわれた省略と書き換え」

閉会

休憩室：　2 日とも 2F 225 教室
書籍展示会場：　1F ガレリア南入口付近

2002年11月29日

日本イスパニヤ学会理事会 御中

東京外国語大学スペイン語研究室

第48回日本イスパニヤ学会大会会計報告

第48回日本イスパニヤ学会大会収支決算につき、下記の通り御報告致します。

記

収入	大会運営費	300,000
	懇親会費(5,000円×77)	385,000
合計		685,000

支出	施設使用料等	40,885
	理事会弁当・飲物代	27,450
	大会掲示記録等費用	27,939
	休憩会場茶菓代	14,900
	講師花束代	5,000
	懇親会費用	387,464
	運営スタッフ謝金(274h×660円/h)	180,840
	雑費	522
合計		685,000

以上

2002年3月31日決算

日本イスパニヤ学会
2001年度会計報告

2002年10月19日

2001年4月1日～2002年3月31日

収入(単位は円)		支出(単位は円)	
2000年度からの繰越金	2,072,152		
正会員会費	3,001,000		
賛助会員会費	240,000		
BACK NO収入	24,000		
銀行預金利子	282		
		センター事務経費	260,789
		センター業務委託費	354,616
		学会誌・会報発行経費	783,279
		大会運営費	270,515
		会議開催費	46,191
		通信・交通費	130,690
		手数料	2,730
		庶務委員経費	60,000
		消耗品	3,118
		保管料	78,120
収入合計	5,337,434	支出合計	1,990,048
現在残高（収入－支出）		3,347,386	

会計委員　小池和良

監査の結果，異常なきものと認めます．　2002年7月20日　会計監査委員　藤田一成
2002年7月20日　長谷川信弥

現在残高内訳	単位は円
学会事務センター預り金	1,741,226
UFJ普通預金	1,541,758
現金	64,402
	3,347,386

2002年10月19日

日本イスパニヤ学会
2003年度会計案

収 入

会 費（8000円×380名）	304万円	

支 出

		2001年度
1. イスパニカ・会報発行経費	110万円	(783,279円)
2. 大会開催費用	30万円	(270,5151円)
3. 学会事務センター業務委託費用	40万円	(354,616円)
4. 学会事務センター事務経費（注1）	50万円	(260,789円)
5. 庶務委員経費	6万円	(60,000円)
6. 理事会開催費用	6万円	(46, 191円)
7. 保管料	8万円	(78,120円)
8. 通信・交通費（注2）	15万円	(130,690円)
9. その他（注 3）	5万円	
合 計	270万円	
収支差額	34万円	

注1 学会事務センター事務経費：会費請求書・会報/イスパニカ等の郵送料・コピー代・事務通信費等

注2 通信・交通費：理事会開催伴う庶務委員の交通費/編集作業に伴う郵便料金・事務センターに依頼しない郵便料金

注3 その他：コピー代・送金手数料・消耗品等

作 成
会計委員 角田哲康 角田

＜ミロ展　Joan Miró: 1918-1945＞を訪れて

浅若　みどり（南山大学）

ジョアン・ミロ（1893－1983）は現代美術の旗手としては日本でも最も愛されている芸術家のひとりである。その前半生にスポットを当てた展覧会が本年 10 月 4 日から 12 月 1 日まで愛知県美術館において開催された（世田谷美術館より巡回）。

ミロといえば、かわいらしい顔や踊るような曲線が飛び交う、色鮮やかでメルヘンチックな画風が思い浮かぶだろうか。しかし、本展はまずフォーヴィズムに染まった作品群で始まる。ここでミロに対するイメージが一変した人もいることだろう。色が重苦しく、特に緑色が暗い。単純化されたフォルムやくっきりした輪郭は、一般にはカタルーニャ・ロマネスクの影響によるとされている。だがミロの場合は寧ろドイツ表現主義に近く、偶然だろうが《ノール・シュド》にはゲーテの本まで登場している。続いて、アンリ・ルソーの如く素朴な《ロバのいる野菜畑》、ダリのようにリアルなテンペラ画《花と蝶》と、実にわかりやすく作風が変遷する。

次の展示空間では、もうフォーヴも細密描写も消えていた。1920 年代の作品には背景に土の色や灰色が使われ、甘すぎず楽しげな画面が展開する。色も次第とにぎやかになっていき、愛らしい怪物のようなものが登場する。鑑賞する方も「これ、踊り子なんだって」と、話が弾んでいた（隅に小さな靴があり、その上に逆 V 字が勢いよく伸びているだけの絵である）。子どもがぐずつきもせず絵を指差して「バナナ！」など、元気に講釈している姿が目立った。展覧会ではこんな光景は珍しい。エッチングや小品を集めた一角も、誰も通り過ぎたりせず熱心にみていた。

37 年の有名な《スペインを助けよ》の頃から、以前よりも実験的なデフォルメが続く。コラージュやグアッシュによる作品で、色も形も迫力があるのだが、この方が寧ろ不人気だった。40 年代から、これもよく知られている「女と鳥」のモチーフが使われるようになる。設定が夜となっているためか地味な配色で、見ようによってはエロチックに見えなくもない。人がまばらになり、そろそろ終わりか、これからがミロの真骨頂なのに、と物足りなく思っていたら、最後に「星座」シリーズのコピーが並べられていた。びっしりと「星」を散りばめた、非常に美しい作品である。正規の展示でないにもかかわらず、ここで再び面白そうに見入る人が多かった。

作品の横に説明は一切なく、時折ミロ自身のことばが添えられているだけである。たまたまかもしれないが、オーディオガイドを聴いている人もほとんどいなかった。ミロには解説が要らないのだろう。初期の作品に限った今回なら、よく冠せられる「地中海のまばゆさを思わせる」といった説明も合わない。もっとも、私が何より印象に残った作品は 28 年の《絵画》で、一面青色の作品だった。空ではなく深海の青である。左上隅にごく小さな巴模様が浮かび、濃淡が深さを演出する。ここまで叙情的な青を見たのは初めてだった。しかし子どもの心には残らなかったらしい。会場の外に「ミロをかこう！」という小中学生向けのコーナーが設置されていたが、ミロをみた後にしては顔や椅子など図柄が具体的で、色があまりにもおとなしい。本展は画家の初期作品を実見できる貴重な展覧会だった。しかし、この時だけは少し淋しくなり、やはりマジョルカ時代の伸びやかなミロを見せてあげたいような気がした。

【新刊紹介】

松久玲子編　『メキシコの女たちの声－メキシコフェミニズム運動資料集』（行路社　2002年）

松久　玲子（同志社大学）

本書は、19世紀末から現代に到るメキシコのフェミニズム運動を、女性たちの言説を収集した第一次資料によって再構築しようとした、日墨の女性学研究者による共同研究を出版したものである。1997年に、編者がメキシコで在外研究中メキシコ大学院大学のPIEM（女性学学際講座）のサマープログラムを受講し、その際に出会ったPIEMの教授陣、女性史のフリア・トゥニョン氏、法学者マルタ・トーレス氏、また、メキシコ大学院大学アジアアフリカ研究所に所属する粟飯原淑恵氏、三浦里美氏、社会学研究所のマリア＝ルイサ・タレス氏の協力を得、資料収集とその編集を行った。

当時、アジアアフリカ研究所では、上野千鶴子氏を中心に『日本の女たちの声』と題した日本のフェミニズム運動のシンポジウムとそれに伴う資料集の出版が計画されていた。たまたま、そのシンポジウムに出席する機会のあった編者と粟井原氏の間で、日本においてもメキシコのフェミニズム運動の情報が非常に乏しく、女性学研究の基礎資料が必要であるという認識をもったことが、この共同研究のきっかけとなった。膨大な資料を抱え日本に戻ると、関西で女性学の研究会を行っていた仲間たち、山蔭昭子さん、林美智代さん、北條ゆかりさんがその翻訳と、メキシコの歴史や社会についての日本人の理解を助けるための背景論文の執筆を分担してくれた。

翻訳作業を含め1998年から3年近く研究会を開催したが、その間、メキシコから粟飯原氏、三浦里美氏、マルタ・トーレス氏が研究会に参加し、私たちもメキシコに出かけメキシコ在住の研究者とともに研究会を行った。それらの共同作業が資料集に結実したわけだが、本の刊行もさることながら、フェミニズムを通じた日墨の研究者の親交が第2の成果であったように思われる。女性学は学問であると同時に、フェミニズム運動を支える理論構築を目指すものであり、それは私たちの生き方と不可欠に結びついている。こうした研究を通じメキシコの女性たちと同じ問題意識を共有し、そのことでさまざまな刺激を受けた結果、本書の刊行となったことは大きな喜びである。

さて、本書の内容に関して紹介すると、第一部は、19世紀末の女性の教育要求を中心とした女権運動から、1930年代に頂点を迎えた女性参政権運動を経て1953年の女性参政権獲得にいたるまでの時期を、4つに区分して時系列的に構成している。第二部は、1970年代から現代にいたる第二次フェミニズム運動を取り上げている。第二部では、アメリカ合衆国の影響を受けてはじまった1970年代からのフェミニズム運動の流れを1章で紹介し、2章以下はフェミニズム運動の重要課題をテーマ別に取り上げた。2章「妻・主婦・母としての女性」では私的領域におけるジェンダー役割について、3章「公的生活：多様な運動とその担い手たち」では、女性労働者と組合運動、縫製女工、マキラドーラの女工たち、都市民衆運動の女性たち、家事労働者、売春婦、農民女性の言説を取り上げ、公的領域における女性たちの問題提起と運動を紹介した。4章「政治参加」ではフェミニズム運動、各政党の女性政策、左翼、右翼両陣営の反体制組織で活動する女性たち、政府の女性政策をとりあげた。5章「身体

と民主主義」では、自由意思による母性（産む産まない自由）、家庭内暴力と性暴力、チアパス農民反乱に参加する女性たちという時事的なテーマを含めたフェミニズムの直面する今日的問題を取り上げた。現在進行中であるメキシコ・フェミニズムのダイナミズムを、階層、民族、政治的に多様な女性たちへのインタビュー資料や調査資料に基づき再現しようとしたものである。

本書の特徴は、第 1 次フェミニズムから現代まで、20 世紀のフェミニズムの言説を網羅したことである。メキシコでもこれだけのフェミニズムの資料を体系的にそなえた本は、まだ、刊行されていないそうで、マリア・タレス氏やマルタ・トーレス氏によりメキシコでも同様の資料集の刊行が計画されていいると聞いている。女性学を通じた日墨の交流がより活発になることと期待している。

【事務局から】

《会員の異動》

新入会員

1. 石井　登（筑波大学大学院地域研究研究科）
   研究テーマ：カルロス・フエンテスの作品研究
   [redacted]
2. 木越　勉（東京外国語大学大学院地域文化研究科）
   研究テーマ：スペイン語統語論、スペイン語教育
   [redacted]
3. 木下まりあ（南山大学）
   [redacted]
4. 後藤美智子
   [redacted]
5. 塚原信行（名古屋大学大学院国際関係開発研究科）
   [redacted]
6. 土井裕文（大阪産業大学）
   [redacted]
7. 花方寿行（静岡大学）
   研究テーマ：19 世紀ラテンアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然描写
   [redacted]

8. 古川美奈子
研究テーマ：メキシコ青年文芸協会に関する考察－メキシコ性の追求をめぐって
[redacted]

9. 三浦麻衣子（東京外国語大学大学院）
[redacted]

10. 結城健太郎（東京外国語大学大学院地域文化研究科）
[redacted]

11. Florentino Rodao（東京大学）
[redacted]

退会者

Amadeo Illera、内田和之、大畑勝代、Elena Gallego、立石博高、M. C. Susana Diego Miguel、波多野眞弓、Manuel Brunet、José Macadam、Ruth E. Miranda Vargas

【編集後記】

2002 年が間もなく過ぎ去ろうとしています。バルセロナの生んだ世界的建築家アントニオ・ガウディ生誕 400 年に当たり、内外でさまざま記念行事が開催され、その偉業が讃えられました。新たなる年のテーマを探している矢先、突然の訃報が飛び込んできました。日本におけるドン・キホーテ研究の第一人者、牛島信明先生が急逝されたのです。先生の死が信じられない日が何日も続きました。同じ思いに駆られた方も多かったことでしょう。ここに先生の生前の偉業を讃え、ご冥福をお祈り申し上げます。

会報も今号で第 5 号、最近では原稿の依頼をする前から玉稿をお送りいただく先生方が増え、嬉しい限りです。あんなことこんなこと、学会に関することなら何でもご寄稿下さい。お待ち致しております。（坂東省次　02.12.20）